特集①

二〇一七年度公開シンポジウム
大久保利謙と日本近代史研究　家族・学問・教育

二〇一七年十二月八日（金）・九日（土）

於　立教大学池袋キャンパス　十号館X二〇四教室（八日）・四号館四三三九教室（九日）

［主催］　立教大学日本学研究所

［共催］　科研費国際共同研究加速基金（課題番号：一五KK〇〇六二、研究代表者：小澤　実）

【開催概要】

「大久保利謙と日本近代史研究　家族・学問・教育」
二〇一七年十二月八日（金）・九日（土）
於　立教大学池袋キャンパス十号館X二〇四教室（八日）・四号館四三三九教室（九日）

〈プログラム〉
十二月八日（金）
マーガレット・メール（コペンハーゲン大学東アジア研究所准教授）
「大久保利謙先生と私の研究　史学史・漢学教育・音楽史を中心に」
十二月九日（土）
小澤　実（立教大学文学部准教授）
「はじめに」
報告1　佐藤　雄基（立教大学文学部准教授）
「大久保利武と利謙　立教大学図書館所蔵大久保コレクションからみた大久保父子の学問形成」
報告2　松沢　裕作（慶應義塾大学経済学部准教授）
「大久保利謙と戦後日本近代史研究の出発」
池袋図書館一階ロビーでの大久保父子関連資料見学
報告3　小澤　実
「大久保利謙と一九五〇－六〇年代の立教大学史学科」
報告4　今井　修（早稲田大学非常勤講師）
「大久保史学の史学史的位置」
質疑応答

【シンポジウム概要】

一　シンポジウムの狙い

明治維新の立役者である大久保利通を祖父、大阪府知事の大久保利武を父とする大久保利謙（一九〇〇－一九九五）は、日本の歴史学者である。東京帝国大学文学部国史学科で教育を受け、戦後、その人脈を通じて国立国会図書館に憲政資料室を創設するとともに、名古屋大学教育学部ならびに立教大学文学部教授をつとめた。大久保は、従来研究対象とはみなされていなかった日本近代史研究を学問分野として確立し、政治史、行政史、文化史、大学史、洋学史、史学史など多様な分野において学問的基礎を築いた。すでに史学史上重要な位置を占める人物である。

大久保の著作は多岐にわたり、現在に至るまで完全な著作目録すら用意されていない。仮のその学術活動を3つに分類するならば、ひとつは、関連資料を精査した上で用意された年史や個人全集の執筆（『東京帝国大学五十年史』『西周全集』『森有礼全集』等）、ふたつめは、日本近代史や近代史を含む大きな歴史叢書の監修（『日本人物史体系』『日本全史』等）、そして三つめに大久保自身の関心に基づく専論とすることができるかもしれない。三つめの専論については、遠山茂樹を編集委員長とする『大久保利謙歴史著作集』（八巻、吉川弘文館、一九八六－一九九三）に主要なものが収められている。以下、著作集のタイトルを挙げておこう。

一巻　『明治維新の政治過程』（一九八六）
二巻　『明治国家の形成』（一九八六）
三巻　『華族制の創出』（一九九三）
四巻　『明治維新と教育』（一九八七）
五巻　『幕末維新の洋学』（一九八六）
六巻　『明治の思想と文化』（一九八八）

七巻　『日本近代史学の成立』（一九八八）
八巻　『明治維新の人物像』（一九八九）

以上の多岐にわたる業績は、間違いなく戦後の日本近代史研究の礎となっている。そのような大久保であってみれば、その後に生まれた網野善彦や安丸良夫らがすでに雑誌での特集対象となることを考えると、その役割を史学史上に位置づける試みがあってしかるべきであろう。我々の手元には、巻末に専門家による解説の付された以上の著作群に加えて、彼の自伝（『日本近代史学事始め』岩波新書、一九九六）も、彼が生前に収集利用した書物などの文庫（憲政資料室、立教大学、学習院大学）と文庫目録（『大久保利謙文庫目録』二巻、立教大学図書館、一九九〇－一九九六）も、彼へのインタビュー記事（「大久保利謙先生に聞く　近代政治史料収集のあゆみ（1）（2）」『参考書誌研究』七三、二〇一〇、七四、二〇一一）や回想談話（「大久保利謙先生をかこんで」『史苑』六二－二、二〇〇二）もある。大久保自身の思想と業績を位置づけるにはさしあたり十分な手がかりはあるといえるだろう。

しかしながらわたしたちは、この大久保に関する回顧的研究をいまだ十分に達成していない。たとえば彼の退職や死去に寄せた記事や（「追悼大久保利謙先生を偲ぶ」『史苑』五七－一、一九九六）、由井正臣による短い伝記紹介を手にすることはできる（「大久保利謙」今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一・木畑洋一編『二〇世紀の歴史家（2）　日本編下』刀水書房、一九九九年）。しかしそれらは、あくまでも、大久保故人を知る関係者による個人的感懐であったり導入的紹介であったりと、人物史・史学史研究そのものへは到達していない。わずかに、大久保の自伝の校正を担当した今井修が、大久保の死の直後刊行した論考の中で（「日本近代史学史研究の構想と方法　その史学史的検討」『社会科学討究』四一－三、一九九六）、大久保の史学史上の位置を跡づけようとしている試みが目につくくらいである。

このような大久保に対する研究現状をかんがみ、大久保自身を史学史的に位置づけることを目的とし、本シンポジウムは企画された。折しも、科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究）（代表小澤実、課題番号15KK0062）による共同研究で、大久保と親交のあったコペンハーゲン大学のマーガレット・メール博士が来日を予定していた。メール博士にもシンポジウムの報告をお引き受けいただき、大久保の知的人格形成に影響を与えたであろう家族、大久保自身が関心を持ち追求した学問、大学教員として研究とともに従事した教育という観点から、歴史家としての大久保を捉え直すことをシンポジウムの焦点とした。

二　報告者と報告内容

シンポジウムでは、五名の研究者が、それぞれ異なる方向から史学者としての大久保を位置づけようとした。

十二月八日は、コペンハーゲン大学のマーガレット・メール博士が「大久保利謙先生と私の研究　史学史・漢学教育・音楽史を中心に」というタイトルの講演をおこなった。メール博士の来日直前に、彼女の主著が翻訳刊行された。マーガレット・メール（千葉功・松沢裕作訳者代表）『歴史と国家　十九世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』（東京大学出版会）である。本書は、現在に至るまで唯一の、個人による、近代日本における歴史学の誕生をあとづけた単著である。原著は彼女の博士論文としてボン大学に提出され、その後ドイツで刊行、後に本人により英訳されてマクミラン社から出版された。その後長らく絶版が続いていたため、彼女自身の個人出版社に版権を移し、来日直前に、長い序文を付した第二版が刊行されることになった（Margaret Mehl, *History and the State in Nineteenth-Century Japan. The World, the Nation and the Search*

for a Modern Past, 2 ed. with new preface, Copenhagen: The Sound Book Press, 2017)。旧著の内容を変更したわけではないが、序文を読む限り、近代日本の史学史をグローバルヒストリーのなかに位置づける試みとして本書を読むことも可能であると著者自身が意義付けている。日本学研究所をプラットフォームとし、報告者らが関わっていた共同研究立教SFR「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」とも呼応する方向性であり、今後の史学史研究のひとつのありかたを示した著作でもある。

メール博士は、博士論文の執筆にあたって、二年間、奨学金を得て、東京大学史料編纂所に留学し史料調査を行った。その時、彼女自身が研究の指針としていたのは大久保の史学史研究であり、また、大久保自身とも接触を持っていた。博士の報告では、博士自身の留学時代における私的な話もはさみながら、大久保の研究を土台として、メール博士自身が、これまでどのような研究をおこなってきたのかを位置づけた。とりわけ、日本の近代史学の成立にあたっては、通常強調されるほどにはルートヴィヒ・リースら洋学の影響は大きくなく、他方で、著作を準備した当時はさほど意識していなかった国学研究の重要性を認識する必要があることを強調した。

十二月九日は、より個別の対象に絞った研究報告がなされた。

第一報告は、佐藤雄基による「大久保利武と利謙　立教大学図書館所蔵大久保コレクションからみた大久保父子の学問形成」。佐藤の報告は、立教大学図書館が所蔵している大久保利謙が寄贈した大久保文庫を調査し、その書き込みなどから、大久保利武・利謙父子の知的形成の一端を探るものであった。大久保の知的形成を理解するにあたって、（1）イェール大学で学びボン大学で学位を取得した父利武の影響をどこまで見積もるか、また、（2）大久保自身がどのような書物を収集しそれらをどのように読み解いたのかといった、個人の知的形成を理解するにあたって不可欠な家族の要素と個人読書のありかたにメスを入れることの重要性を確認した。佐藤の報告は、第二報告後におこなわれた大久保文庫所蔵書籍の展示会と一体となっており、結果として、報告と展示会による大久保理解の相乗効果が得られたと理解しうる。

第二報告は、松沢裕作「大久保利謙と戦後日本近代史研究の出発」。松沢は、日本近代史学の祖と言われる大久保の知的形成と材料収集を論じるにあたって、しばしば言われるように、明治の元勲の孫であり華族としての家系ネットワークに依存していたという言説をいったん脇に置き、彼自身の歴史書とりわけ年史編纂への関わりに目を向けた。松沢によれば、近代史の祖と言われる大久保をつくったのは、若いころから彼に委嘱された年史の作業であり、その資料収集と記述作法を習得する過程で、記述対象との距離をとる大久保のスタイルが生まれてきている。近代におけるある時代に関するアカデミックな歴史記述は、その前段階に当該テーマに関する史料編纂があり、それは近代史研究も変わらない、と主張した。

第三報告は、小澤実「大久保利謙と一九五〇－六〇年代の立教大学史学科」。小澤の報告は、大久保が日本史学専任教員としてつとめた時代前後の立教大学史学科の職場環境と学的構造を探るものであった。報告内容が対象とする時期は、昨年三月に行われた「史学科の比較史」で報告した戦前の立教大学史学科に関する事例の続きの時代にあたる。小澤は、当時の教授会記録や文学部便覧、『史苑』の彙報欄、大久保に関わりのあった者たちの証言、立教時代に大久保が刊行した諸著作のあとがきなどを資料として利用し、大学紛争以前の立教大学史学科の雰囲気を明らかにしようとした。立教時代の大久保の注目すべき成果として指摘したのは、同僚や立教周辺の専門家をまとめて刊行した特異な研究入門（大久保利謙・海老沢有道編『日本史学入門』廣文社、一九六五）である。

大久保が招聘された時代の立教史学科が、多大の史学科に比べて、やや特殊な時代構成と方法論をもつ組織であることを指摘した。

第四報告は、今井修の「大久保史学の史学史的位置」。すでに述べたように、今井は大久保の自伝の校正を担当しており、大久保の肉声を知る立場にある。報告内容は大久保を史学史上に位置づけるための作法についての方法論の提示であり、（1）テキストを網羅的に編年的に読み、（2）そのテキストの形成過程を読書記録などから内在的に再構成し、（3）同時代の史学者たちとの比較や交流の中で位置づけよというのが骨子であった。知識人の伝記をまとめるに際してごく当たり前のことを指摘しているように見えるが、日本の史学史研究でこのような基本的な作業を適用したものはほとんど存在せず、大久保に至っては網羅的な文献目録すら用意されていないという学界の現状を批判した。他方で、大久保の記述の特徴をさまざまな議論を呼び込むことを可能にする「開放性」と位置づけ、一見世間の動きと距離を取っているようにみえる大久保の歴史記述も、必ずしも同時代の動向に対する無関心を示しているわけではないことも指摘した。

第二報告と第三報告のあいだに、池袋図書館一階ロビーにて、佐藤雄基と図書館職員との協力により、大久保文庫からの大久保父子の書き込みなどがある書籍が展示された。これらは第一報告の資料でもあるが、実際に大久保父子の書き込みを手にとって見ることができ、第一報告の意義を確認しうるとともに、大久保父子の関心と息遣いを実感することが可能となり、参加者には貴重な経験となった。なお、今回のシンポジウムは、新しい執筆者を加えて、論集として刊行される予定である。

（おざわみのる　立教大学文学部教授）